



未来を担う頭脳が集まるムラタグループ最大のR&D拠点 地域密着を重視した事業所

R&Dの一大拠点として、
生産技術開発、材料開発、工法開発などを担う

村田製作所が滋賀県野洲市に事業所を開設したのが1987年。以降、R&Dの拠点として、生産技術開発、材料開発、工法開発、デバイス開発などを担っている。

ムラタは生産設備の自主開発を得意としている。生産技術開発の部門では、社内で使用する設備は汎用の市販設備を購入するのではなく、自主開発することでオリジナルのラインを構築し、独自の工法で量産を行っている。製造業において、QCD（品質・価格・納期）の向上は至上命題。そのためには、自社の生産環境の整備、生産設備の性能向上は必須である。それらが品質やコストにもたらす影響は大きい。だからこそ、野洲事業所では設備の開発にこだわり、オールムラタの生産性向上に努めてきた。

材料開発では、長年培ってきた誘電体材料、圧電体材料、磁性体材料などをはじめとするセラミック材料の開発はもとより、新規材料として、例えば、機能性有機材料など、常に新しい機能をもった材料の探索を行っている。

また野洲事業所は、同じ滋賀県に位置する八日市事業所を補完する形で、国内や海外の生産拠点へセラミック材料をはじめ

とする原材料を供給するという大きな役割も担っている。

現在の従業員数はおよそ2,700名、年齢層の若い優秀な労働人口が多いこの地で、地域とともに発展している。

ムラタセイサク君[®]、
技術の源泉は野洲事業所にあった

ムラタの技術力の高さを、子どもたちを含めた世界中の人々に知らしめたのが、「ムラタセイサク君[®]」である。長岡事業所に生まれた彼が、静止する自転車に倒れず乗れるバランス感覚を持つようになったのは野洲事業所の技術陣のおかげだ。S字カーブの平均台を走行できるのはもちろん、2010年には、新たに省エネルギー化に役立つセンサや通信モジュールなどを搭載したエコモデルとなり、自らの消費電力をモニタリングし、赤外線センサで人の有無を検知して節電し、ワイヤレスで充電するなどの機能が付加された。小学校での出前授業などで活躍、テレビCMに出演するなど、最近ではすっかり人気者になっている。

現モデルの開発を担当したのは、「セイサク君開発チーム」というプロジェクトチームで、野洲事業所で生産技術開発に携わっていた技術者たち。彼らの技術を結集して作られた。縁の下の力持ちである電子部品の働きをアピールするのに一役買っている。

積極的な地域貢献と緑化活動 地元住民と一体となった取り組み

野洲事業所では地域貢献活動を積極的に行っている。事業所周辺の清掃から始まり、琵琶湖の清掃、事業所の東側に位置する山道の整備などに取り組んでいる。さらに、地元小学校に対しては、環境教育の一環として出前授業を行う。小学校に向いて、省エネやCO₂に関する知識をクイズ形式で伝え、同時にムラタセイサク君[®]も出張して、楽しく環境を学べるよう工夫した取り組みだ。

事業所の敷地内は、約23%が緑地ゾーンになっており、樹木340品種約19,600本が植えられている。春夏秋冬を通して花の咲く事業所を目指し、これまでに滋賀県緑化コンクールでは銀賞、日本緑化センターの会長賞を受賞。2007年には関西で初めて、SEGES(社会・環境貢献緑地評価システム)の認定を受け、2008年には同Excellent Stage 3維持認定を受けている。恒例行事として、滋賀県の郷土の花として知られるしゃくなげの観賞会を催し、地域の住民を招き入れる。同時に行うチャリティバザーでの収益金で車椅子などを購入。近隣の特別養護老人ホームへ寄贈すると同時に、清掃活動などのボランティアも行っている。こうした地元と手を携えた地域貢献活動を労使が協力して行う活動を「MYU-TOWN(ミュータウン)活動」と名付けて積極的に展開している。

今後は、施設内にビオトープを作るなど、さらに緑地を整備して、地元住民にも開放し、地域とのコミュニティづくりに取り組もうとしている。これらの活動を通して、野洲事業所は、エレクトロニクス部品やモジュールの可能性を追求するR&D拠点であると同時に、野洲という地域に愛される存在を目指している。

テーマは環境と緑化活動

環境保護と緑化に対しては、並々ならぬ努力をしている。すでに10年以上前からコーポレーションシステムを導入、消費電力の62%を補い、CO₂排出量を約24%削減している。施設内の緑化スペースは「地域との調和」「心身ともにリフレッシュできる環境の提供」を目指し、整備に当たっている。



ムラタセイサク君[®]

ロボットをひとつの動的なメディアと見立てて、自社のデバイスやモジュール、そして技術力・モノづくりパワーをPRする取り組みとして野洲事業所の開発チームが育てた「ムラタセイサク君[®]」。後ろは野洲事業所で生まれた一輪車型ロボット「ムラタセイコちゃん[®]」。「すごい」と思ってもらえるものを作りたい、その思いが人気ロボットを作り出した。



近江富士と生きる街「滋賀県野洲市」

野洲市には「近江富士」といわれる三上山が鎮座する。その姿は暮らしの中に溶け込み、春夏秋冬を通じて人々の心に安心感を与えている。そして西には“近畿の水瓶”、琵琶湖が広がる。このように野洲市には、まだまだ自然が残されている。

■ 滋賀県のランドマーク近江富士



三上山は、標高は432mにすぎないが、その秀麗な姿から近江富士と呼ばれている。滋賀県の広い範囲から見えるランドマークであるとともに、1300年の歴史を持つ御上神社のご神体でもある。ふもとには、近江富士花緑公園や希望が丘文化公園などゆたかな自然を生かした施設が整備されている。

■ 2000年の時を超えた「銅鐸のまち」



弥生時代には青銅器と米づくりは、共同社会のシンボルであったと考えられている。野洲市の大岩山丘陵からは、1881年に14個、1962年に10個の計24個もの銅鐸が見つかり、中には高さ134.7cm、重さ45.47kgの日本最大のものも含まれている。市内にある「銅鐸博物館」では、その鑄造方法や推移について説明している。

■ 街道と川、湖がもたらす「野洲文化」



右: 分岐点の道標

左: 野洲川の渡し
『木曾路名所図会』
(1804年)より

市内には中山道と朝鮮人街道の分岐点がある。中山道は江戸幕府によって整備された五街道のひとつ。朝鮮人街道は外交使節団として来日した朝鮮通信使が通った道だとされている。難所と伝えられる野洲川には渡しがあり、豊富な水を生かして「野洲さらし」が行われ、さらされた麻布は近江商人によって全国へと運ばれた。琵琶湖とともに、水に育まれた土地である。